

bekommen 構文の意味的展開と bekommen 受動*

大 藪 正 彦

1. はじめに

本稿の目的は、bekommen 受動を bekommen 構文の意味的展開という観点から捉え、それにより bekommen 受動の成立条件についての統一的な説明を提示することにある。その際、とりわけ表現の形式的側面に着目するが、それは、現在の認知言語学の知見に基づき、意味と形式が互いに「動機付けられた」関係にあるという想定に立つものである。

bekommen 構文とは、動詞 bekommen を含むすべての構文を指すものとする。また、bekommen 受動とは、一般的な定義に従い、次の(1)のように「(助動詞として用いられた) bekommen / kriegen / erhalten + 動詞の過去分詞」という構造を持ち、さらに能動文の3格に対応する統語的主語を含む構文を指すものとする (Leirbukt 1987: 99 を参照)。

- (1) Er bekommt / kriegt / erhält das Buch geschenkt.
(Vgl. Maria schenkt ihm das Buch.)

bekommen 受動は、このように3つの異なった助動詞から形成されるが、これら3つの動詞は基本的に類義語であり、その中でも bekommen が文体的に最も中立的であるという理由から、以下、bekommen を中心に取り扱うことにする。さらに本稿では、考察の対象を統語的主語が「人」を表わす構文に限定する。無生物主語の bekommen 受動は極めて限られている (Wegener 1985a: 208f.)。

2. bekommen 構文の意味的展開

2.1. bekommen 構文のスキーマ

まず始めに、動詞 bekommen の基本的な意味用法を確認しておきたい。bekommen によって形成される統語的に最も単純な構文は、1格主語及び4格目的語を取る構文で

* 本稿は第25回語学ゼミナール(1996年8月26日、箱根)における口頭発表 „Zu Bildungsbedingungen des bekommen-Passivs“ に基づいている。インフォーマントとして Andreas Hendrich (慶応義塾大学) 及び Frank Mielke (東京外国語大学) の両氏に協力して頂いた。深くお礼申し上げます。

ある。一方、「具体から抽象へ」という一般的な意味の転用の傾向を考慮すれば、次の(2)のような例が bekommen の最も基本的な用法であると見なすことができる。

(2) Er bekommt ein Buch.

ここでは、「ある対象物が主語の所有に至る」ということが表わされている。表現されている状況は、図式的には次のように表わすことのできるものである。

(3) ○ ← ○

1 格

この図式は、認知言語学的な意味におけるスキーマ——すなわち、人が状況を認知し言語化する際に用いると想定される抽象的な図式的イメージ——として有効に機能していると考えられるが、その点については以下の考察で明らかにしていきたい。左の円は1格でコード化される受容者を表わし、右の円は受容される物(受容物)を表わしている。受容物はここでは4格でコード化されている。矢印は当該の受容物の主語への具体的もしくは抽象的移動の方向を表わしている。ここで、bekommen 構文の主語が受動的な受容者であるということを確認しておこう。

(4) a) *Bekomm das Buch!

b) Er hofft, daß er das Buch bekommt.

一般に、命令形を作ることができるのは、意図的な行為を表わす動詞のみであり、逆に(4b)のような hoffen を使った願望表現が可能であるのは、意図的な行為を表わさない動詞のみである(城岡 1983)。

受容物は、次の例が示すように抽象的な場合もある。

(5) Er bekommt eine Antwort / einen Befehl / eine Nachricht.

(6) Er bekommt einen Kuß / ein Lob/Besuch.

(Vgl. Er wird geküßt / gelobt / besucht.)

4格で表わされているのは、それぞれ伝達物と行為であるが、興味深いことに、いわゆる動作名詞が4格目的語となっている(6)では、受動文的な意味合いが認められる。

2.2. 統語的拡大

動詞 bekommen にはさらに統語的拡大を伴った意味用法がある。まず、いわゆる述語的形容詞が付加されると、受容物の様態が表わされる。

(7) Er bekommt das Glas ungewaschen.

また、方向規定を伴った場合、4格指示物の到達点が明示されることになる。

(8) Er bekommt einen Stein an den Kopf.

(8) ではすでに「所有権の変化」を問題にすることができなくなっているが、当該の4格指示物が、少なくとも主語の方向へ物理的に移動していることが確認できる。このことはしかし、次の例では当てはまらない。

(9) Man konnte ihn nicht mehr ans Klavier bekommen.

(10) Sie wollten den Gefangenen frei bekommen.

方向や状態を表わす語句を伴うこの構文は、「主語が4格指示物の位置変化・状態変化を達成する」ということを表わす。この bekommen の用法は通常口語的とされる。¹⁾

3. bekommen 受動

3.1. 「bekommen+過去分詞」構造の多義について

以上の点を踏まえつつ、次に「bekommen+過去分詞」構造の多義について考察する。この構造は、場合により次の3通りの読みが可能である (Reis 1985 を参照)。

(11) Wir bekommen / kriegen / erhalten die Gläser gewaschen.

a) 私たちはグラスを洗ってある状態で受け取る。

b) 私たちはグラスを(首尾よく)洗ってある状態にする。(bekommen / kriegen のみ)

c) 私たちはグラスを洗ってもらう。(=bekommen 受動)

Reis (1985) 及び Wegener (1985b) は、当該の構造がそれぞれの読みに応じて統語的に異なったふるまいを示すことを指摘し、この3つの読みの区分を根拠付けた。加えて、c) の読みの場合、当該の文は受動態であるということを論じている。しかしながら、これら3つの用法がどのように関連し合っているのかという点についてはまだ十分な議論がなされていないように思われる。ここでは、a) から c) に至る意味的なつながりを示すことによって、形式的に同一のこれら3つの用法を関連付けて捉えることが可能であるということを示したい。²⁾

出発点となるのは、すでに言及した次の文である。

(12) Er bekommt das Glas ungewaschen / gewaschen.

彼はグラスを洗ってない / 洗ってある状態で受け取る。

いわゆる述語的形容詞によるこの種の文構造の拡大は、次の例が示すように、ドイツ語

1) erhalten にはこの用法はない。

2) 以下の議論は、英語の「have+過去分詞」構造を取り扱った Ikegami (1986) に部分的に依拠するものである。誤解を避けるために付け加えておくと、本稿で考察するのは各用法の歴史的推移ではなく、体系的な関連性である。

において広く見られるものであり、従って (12) の拡大も十分に動機付けられた、極めて自然なものであると言える。

(13) Er trinkt den Kaffee schwarz.

(14) Er kauft das Auto gebraucht.

ところで、これらの文が「述語的」(prädikativ) な解釈を受けるのに対し、一方で、形式的に同じ構造が次のように「結果的」(resultativ) な解釈を受ける場合がある。

(15) Er küßt das Kind wach.

(16) Er trinkt das Glas leer.

「述語的」な前者のタイプと「結果的」な後者のタイプは、形式的に同一であるため、場合によって、次のように1つの文が両方の解釈を許容することがある。

(17) Du mußt das Hemd trocken bügeln. (堀口 1982: 11)

両者のタイプが異なるのは、後者では述部を形成する2つの文成分——例えば „Hemd“ と „trocken“——の関係が動的に捉えられるという点である。同じことは bekommen 構文の a) の読みと b) の読みの間にも言える。上例 (12) で言えば、„gewaschen“ は目的語 „Glas“ の静的な状態を表わしていた。この „Glas“ と „gewaschen“ の間の関係が動的に解釈されると、文全体としては「結果的」な読み、すなわち b) の読みを獲得することになる。

(18) Er bekommt das verschmutzte Glas sauber / gewaschen.

彼は汚れたグラスを(首尾よく)きれいな / 洗ってある状態にする。

これは同時に動詞の意味に影響を与える。そこではもはや「所有権の変化」といった典型的な bekommen の意味合いは失われることになる。それでも bekommen はなお本動詞として機能しており、さらに、「主語が首尾よくある結果を得る」といった意味合いの中に bekommen の本来的な意味用法との関連性を見て取ることが可能である。

最後に c) の読みであるが、この受動文としての読みの重要な前提は、当該の構造に動詞の過去分詞が含まれていることである。この読みは、過去分詞自体が動的に捉えられ、同時にその動作主が概念化されたものであると考えることができる。³⁾ なお、この動作主が——それ自体は論理的な性質のものであるが——1格主語と同一であるならば、次のように b) の読みにとどまることになる。⁴⁾

3) このように過去分詞が動的に捉えられ、その動作主が概念化されるという考え方は新しいものではなく、例えば英語の完了表現や受動表現との関連ですでに言及されているものである (Ikegami 1986, 柴谷 1993)。

4) この場合、„gewaschen“ の動作主は論理的には „er“ 以外の人間であってもよいわけであるが、筆者のインフォーマントによると、この解釈は通常のコテキストではやや不自然なものであるということである。

(19) Er hat das Glas gerade noch gewaschen bekommen.

彼はグラスを何とか洗った。

一方、過去分詞の動作主が1格主語以外の誰かであれば、当該の構造は受動文としての解釈を受けることになる。bekommen が助動詞として機能するc)の読みである。

(20) Er hat von ihr das Glas gewaschen bekommen.

彼は彼女にグラスを洗ってもらった。

3.2. bekommen 受動のタイプ

次に、bekommen 受動のタイプについて簡潔に見ていく。ここでは先行分析に基づき、統語的・意味的に分類可能な5つのタイプを設定するが、これらは離散的なものではなく、部分的に重なり合うものである。

(21) Er bekommt ein Buch geschenkt. (タイプ1)

(22) Er bekommt ein Märchen erzählt. (タイプ2)

(23) Er bekommt den Mantel um die Schultern gelegt. (タイプ3)

(24) Er bekommt den Arm gebrochen. (タイプ4)

(25) Er bekommt geholfen. (タイプ5)

最初のタイプは、本動詞が授与動詞のものである。基本的には「ある対象物が主語の所有に至る」ということが表わされ、bekommen の本来的な意味用法との関連は明らかである。過去分詞は、次の例に見られるようにいわば受容の様態を表わしている。

(26) Er bekommt ein Buch geschenkt / geschickt / geliehen.

第2のタイプは、伝達動詞によるものである。この段階ですでに「所有権の変化」という意味合いが薄れてくる。

(27) Er bekommt ein Märchen vorgelesen / die Wahrheit gesagt.

第3のタイプは、方向規定を伴うものである。上の2つのタイプの主語が対象物や伝達物の受容者であるのに対し、ここでの主語が厳密な意味での受容者かどうかは曖昧である。

(28) Er bekommt Farbe auf die Hose gestrichen / Blumen in den Garten gepflanzt.

ただしここで注意しておかなければならないのは、方向規定によって表わされる到達点、主語にとってある一定の密接な領域に属するものであるということである。上例で言えば、方向規定の表わすものは主語の「身体部位」「衣服」「所有物」などである。このように、ある人にとって何らかの形で重要な関わりを持つ具体的・抽象的な対象物を含んでいる物理的・心理的領域のことを「密接領域」と呼ぶことにする。そうすると、

「ある対象物が主語の密接領域に至る」という意味において、ここでも bekommen の本来の意味との関連性が保たれていることが見て取れる。

次の第4のタイプでは、具体的には何も主語の領域には移動していない。このことは、(30)のように、離脱を表わす動詞が本動詞として用いられた場合いっそう明らかになる。

- (29) Er bekommt den Rücken gekratzt / die Wange geküßt.
 (30) Er bekommt den Verband abgemacht / das Hemd ausgezogen.
 (31) Er bekommt auf den Kopf geschlagen / auf den Fuß getreten.

ここでの本動詞は、4格や前置詞句で表わされた対象に及ぶ行為や出来事を表わしている。すぐに気づく通り、ここでは4格や前置詞句の指示物が主語の密接領域に存在している。従ってここでもなお、「ある行為や出来事が主語の密接領域に及ぶ」という意味において、bekommen の本来の意味との関連性が保たれていることが分かる。

最後のタイプは、目的語を含んでいないという点でこれまでのタイプとは統語的に区別される。もっとも目的語を補うことが可能な場合もあり、その場合はこれまでのタイプとの関連性が見て取れる。

- (32) Er bekommt (Kognak) eingegossen. (→タイプ1)
 (33) Er bekommt (vieles) geantwortet. (→タイプ2)
 (34) Er bekommt (die Tür) geöffnet. (→タイプ4)

しかし、次のように目的語を補うのが困難な例もある。ただしこの場合は、括弧の中のパラフレーズが示すように、主語が、動詞から特定可能な行為内容の受容者であるということが指摘できる (Leirbukt 1987: 113ff. を参照)。

- (35) Er bekommt geholfen / applaudiert. (Vgl. Er bekommt Hilfe / Applaus.)

3.3. bekommen 受動の成立条件

それでは bekommen 受動の成立条件を見ていきたい。bekommen 受動は、部分的には統語的に制約を受けており、例えば再帰3格は bekommen 受動の主語になることができない (Leirbukt 1987: 100)。

- (36) Du hast dir dann die Mütze aufgesetzt. ↯ Du hast dann die Mütze aufgesetzt bekommen. (ebd.)

しかしながら、統語的要因だけで bekommen 受動の成立を説明するのは不可能である。以下に見るように、この受動文の成立には意味的な要因が関与している。

Wegener (1985a: 207f.) は、この受動文に必要な条件として「深層主語の動作主性」と「本動詞の結果性」を指摘した。「動作主性」という基準に対してはしかしながら、

Leirbukt (1987: 104) によってすでに反例が挙げられている。bekommen 受動は、次の例が示すように、物理的な過程においても形成され得る。

- (37) [...] während wir [...] von der Sonne [...] Energie zugestrahlt bekommen
[...] (ebd.)

この場合、「動作主性」という概念を拡張して適用することも一応可能であるが、筆者の見解では、そのような概念は、Wegener のいう「結果性」と表裏一体の関係をなすものであり、従って特に「動作主性」という基準を設定する必然性はなくなる。

Wegener は、「結果性」という概念を——すでに Hentschel / Weydt (1995: 175 f.) が指摘している通り——本動詞の表わす行為・出来事によって目的語の被る影響度という意味合いで用いている。静的 (statisch) な意味内容の動詞からは bekommen 受動を形成できない。

- (38) *Ich bekam mein Glück gegönnt / mißgönnt. (Wegener 1985 b: 134)

- (39) *Er bekam von mir mein Glück verdankt. (ebd.)

ここで注意しておきたいことは、bekommen 受動は、結果を含意する動詞でなくとも、一定の他動的影響度が認められる動詞であれば形成可能であるという点である (例文 (41))。

- (40) Sie bekommt von ihm den Arm gebrochen.

- (41) Sie bekommt von ihm ordentlich auf den Fuß getreten.

- (42) *Sie bekommt von ihm in die Augen gesehen.

この関連で次の点が興味深い。人の身体部位に向けられた行為が表現される場合、一般に他動性の高い行為では身体部位は 4 格でコード化され、一方、他動性の低い行為では身体部位は前置詞句でコード化される (清野 1991)。ただし中には、streicheln や küssen のように、能動文において、行為の対象となる身体部位が他動性の高さに応じて 4 格でも前置詞句でもコード化され得るような動詞がある。ところがこれらの動詞を用いた bekommen 受動では、高い他動性が表わされる場合、すなわち身体部位が 4 格でコード化された場合の方が、明らかに容認度が高い。

- (43) a) Sie bekommt von ihm die Wange geküßt.

- b) ??Sie bekommt von ihm auf die Wange geküßt.

- (44) a) Sie bekommt von ihm das Haar gestreichelt.

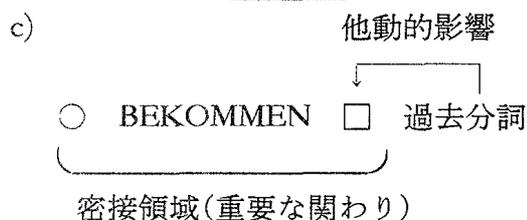
- b) ??Sie bekommt von ihm übers Haar gestreichelt.

次に、もう一点の成立条件について考えてみたい。これまで何度か、bekommen 受動の本動詞の表わす行為・出来事が、主語の密接領域に存在する (主語にとって重要な関わりを持つ) 対象と関連していることを指摘してきたが、これは、本動詞の他動性と

並ぶ bekommen 受動の成立条件である。⁵⁾ 問題となるのは、タイプ3の方向規定及びタイプ4の4格(あるいは前置詞格)目的語によってそれぞれ表わされる項である。2つの成立条件がそれぞれ文のどの部分に関係するものであるのかを次の(45c)に図式的に示す。

(45) a) Er bekommt den Mantel auf die Schultern gelegt. (タイプ3)

b) Er bekommt den Arm gebrochen. (タイプ4)



それでは、具体例を通してこの条件が bekommen 受動の成立にどのように関わっているのかを見ていきたい。

(46) Die Mutter hat von den Kindern warmes Wasser in die Badewanne gegossen bekommen.

この文は通常、浴槽の中にいる母親のところへ子どもたちがお湯を流し込んだということの意味する。しかしコンテキスト次第では、母親の居場所にかかわらず、浴槽にお湯を入れたいが何らかの理由で自らそうすることのできない母親のために、子どもたちがお湯を入れてあげたという状況を表現することも可能である。その場合は、浴槽にお湯を入れようという母親の意向により、母親と浴槽の間に重要な関わりが生じるわけである。

次の文は、一見不自然な表現であると感じられるものである。

(47) ?Das Kind bekommt das Plakat abgerissen.

ところが、問題のポスターが子どものお気に入りのものであったり、神経にさわるものであるというようなコンテキストが与えられると、この文の容認度が上がる。ポスターが子どもの密接領域に存在しているかどうか、文の容認度に重要な影響を及ぼしているわけである。移動物の到達点(タイプ3)及び行為・出来事の対象物(タイプ4)が主語の密接領域に存在しなければならない(主語にとって重要な関わりを持つものでなければならない)というこの条件は、次のような対立を見た場合いっそう明らかとなる。

(48) a) Er bekommt ein Messer in die Brust gestochen.

b) *Er bekommt ein Messer in die Brust seines Freundes gestochen.

5) これと同様の概念が、3格の実現をめぐる問題との関連ですでに小川(1991)によって導入されている。ここでは「言語的に有意味な距離」という表現が用いられているが、本稿では簡潔に「重要な関わり」という表現を用いた。

- (49) a) Er bekommt den Arm gebrochen.
 b) *Er bekommt den Arm seiner Tochter gebrochen.

すぐ気づくことだが、上例(48)(49)の容認度は対応する能動文と平行するものである。ただし、この条件が受動文の方により強く作用するということを示すような例も見られる。

- (50) a) Ich habe von meinem Vater die Unterstützung entzogen bekommen.
 b) ??Ich habe von ihr ihre Hand entzogen bekommen.
 (Vgl. Sie hat mir ihre Hand entzogen.)

- (51) a) Er hat vom Polizisten den Führerschein abgenommen bekommen.
 b) ?Der Briefträger hat von ihm das Päckchen an der Haustür abgenommen bekommen.
 (Vgl. Er hat dem Briefträger das Päckchen an der Haustür abgenommen.)

さて、以上の2つの条件をどのように統一的に把握することが可能であろうか。各々の bekommen 構文間の関連性はすでに確認してきた通りであるが、そこで重要なことは、bekommen 受動も最終的には最も基本的な bekommen 構文と関連付けられるということである。ここでもう一度、これまでとは逆の方向でそのつながりを示すと次のようになる。

- (52) a) Er bekommt die Tür geöffnet.
 b) Er bekommt das Glas gewaschen.
 c) Er bekommt das Glas sauber.
 d) Er bekommt ein Buch.

これまでの考察から、bekommen 受動の背後にも、基本的 bekommen 構文と共通のスキーマが存在していることが十分に見て取れるであろう。すなわち、bekommen 受動は、基本的な bekommen 構文に依拠する形で、「ある対象物や一定の効果が主語に至る」という状況を中心的に表現しているのである。このスキーマの把握が困難になると、それとともに文の容認度も落ちてくる。

- (53) a) Er bekommt den Verband abgemacht.
 b) ?Er bekommt das Plakat abgerissen.
 c) *Er bekommt mein Glück verdankt.

一定の効果が主語に至るには、主語にとって「重要な関わり」を持つ対象が、行為や出来事によって「一定の影響」を受ける必要がある。つまり、bekommen 受動の成立条件として上の2つの条件が存在するのは、bekommen 構文の基本的な意味機能と照らし合わせて考えた場合、極めて自然な帰結であるということになる。

4. おわりに

以上, bekommen 構文の種々の意味用法が統語的・意味的に動機付けられた形で展開しているということを見てきた上で, 最終的に bekommen 受動の成立についても, 基本的な bekommen 構文と関連付けて考えることによって, 自然な形で説明が与えられるということを述べた。従来, 対応する能動文との関連で論じられることの多かった bekommen 受動であるが, 形式的により類似している他の bekommen 構文との関連で考えてみると, その成立に関わる現象が十分に意味のあるものであるということが分かるのである。

[参考文献]

- Hentschel, Elke / Harald Weydt (1995): Das leidige *bekommen*-Passiv. In: Heidrun Popp (Hg.): *Deutsch als Fremdsprache: an den Quellen eines Faches*. München: Iudicium, 165–183.
- 堀口里志(1982): 「述語的形容詞の用法——den Kaffee *schwarz* trinken のタイプ」『*Der Keim*』6, 5–18.
- Ikegami, Yoshihiko (1986): The Drift toward Agentivity and the Development of the Perfective Use of *have*+pp. in English. In: Dieter Kastovsky / Aleksander Szwedek (eds.): *Linguistics across Historical and Geographical Boundaries*. Vol. 1. Berlin: Mouton de Gruyter, 381–386.
- Leirbukt, Oddleif (1987): Bildungs- und Restruktionsregeln des *bekommen*-Passivs. In: C.R.L.G. (Hg.): *Das Passiv im Deutschen*. Tübingen: Niemeyer (=Linguistische Arbeiten 183), 99–116.
- 小川暁夫(1991): 「3格の実現について」『*ドイツ文学*』87, 119–130.
- Reis, Marga (1985): *Mona Lisa kriegt zu viel* — Vom sogenannten ‚Rezipientenpassiv‘ im Deutschen. In: *Linguistische Berichte* 96, 140–155.
- 清野智昭(1991): 「身体表現における4格目的語の機能」『*熊本大学文学部論叢*』35, 138–152.
- 柴谷方良(1993): 「認知統語論と語用論」『*英語青年*』8月号, 5–7.
- 城岡啓二(1983): 「意志動詞と無意志動詞の対立」『*Der Keim*』7, 56–70.
- Wegener, Heide (1985a): *Der Dativ im heutigen Deutsch*. Tübingen: Narr.
- Wegener, Heide (1985b): „Er bekommt widersprochen“ — Argumente für die Existenz eines Dativpassivs im Deutschen. In: *Linguistische Berichte* 96, 127–139.

Die polysemantische Erweiterung der *bekommen*-Konstruktion und das *bekommen*-Passiv

Masahiko OZONO

Das Ziel dieses Aufsatzes besteht darin, das *bekommen*-Passiv in der polysemantischen Erweiterung der *bekommen*-Konstruktion aufzufassen und dadurch eine einheitliche Erklärung für die Bildungsbedingungen dieses Passivs vorzulegen.

Ich ziehe dabei besonders die formale Seite des Ausdrucks in Betracht. Dabei wird vorausgesetzt, an die neuere kognitive Linguistik anlehnd, daß Bedeutung und Form zueinander in einer sogenannten „motivierten“ Beziehung stehen.

Unter der *bekommen*-Konstruktion verstehe ich alle Konstruktionen mit dem Verb *bekommen*. Mit dem *bekommen*-Passiv erfasse ich, wie man es im allgemeinen versteht, Konstruktionen wie (a), die ein als Hilfsverb verwendetes *bekommen* / *kriegen* / *erhalten* + Partizip II aufweisen und ein syntaktisches Subjekt haben, das einem Aktivsatz-Dativ entspricht (vgl. Leirbukt 1987: 99).

(a) Er bekommt / kriegt / erhält das Buch geschenkt.

Ich behandle allerdings exemplarisch das Verb *bekommen*, da diese drei Verben synonym sind und darunter *bekommen* stilistisch als am neutralsten gilt.

Die Verwendungsweise des Verbs *bekommen* wie in (b) kann syntaktisch sowie semantisch als grundlegend betrachtet werden.

(b) Er bekommt ein Buch.

Der Satz drückt aus, daß ein Gegenstand in den Besitz des Subjekts gelangt. Die ausgedrückte Situation kann wie folgt grob schematisiert werden.

(c) ○ ← ○
Nom

In der ersten Hälfte dieses Aufsatzes versuche ich aufzuzeigen, wie sich die Verwendungsweise der *bekommen*-Konstruktion syntaktisch und semantisch zum *bekommen*-Passiv hin auf motivierte Weise erweitert.

(d) Er bekommt ein Buch.
Er bekommt das Glas sauber.

Er bekommt das Glas gewaschen.

Er bekommt die Tür geöffnet.

In der letzten Hälfte untersuche ich die Bildungsbedingungen des *bekommen*-Passivs, wobei ich fünf Haupttypen unterscheiden möchte.

- (e) Er bekommt ein Buch geschenkt. (Typ 1)
- Er bekommt ein Märchen erzählt. (Typ 2)
- Er bekommt den Mantel um die Schultern gelegt. (Typ 3)
- Er bekommt den Arm gebrochen. (Typ 4)
- Er bekommt geholfen. (Typ 5)

Als eine Bedingung, die bei allen Typen des *bekommen*-Passivs erfüllt sein muß, wird die Affiziertheit des Objekts durch den vom Vollverb bezeichneten Vorgang genannt. Bei Sätzen des Typs 3 und 4 kommt eine weitere Bedingung zum Tragen, nämlich, daß der Referent der Richtungsbestimmung bzw. des Akkusativ- oder Präpositionalobjekts im Relevanzbereich des Subjektreferenten vorhanden sein muß.

Wenn man es hier noch einmal berücksichtigt, daß sich die *bekommen*-Konstruktionen aufeinander beziehen und auch das *bekommen*-Passiv letztlich auf die grundlegende *bekommen*-Konstruktion zurückzuführen ist, fügen sich die beiden Bedingungen zu einem einheitlichen Bild zusammen. Das Schema von (c) liegt nämlich auch dem *bekommen*-Passiv zugrunde. D.h., das *bekommen*-Passiv stellt diesem Schema gemäß diejenige Situation zentral dar, in der eine Sache bzw. ein bestimmter Effekt zum Subjektreferenten gelangt. Die Sätze unter (f) zeigen, wie dieses Schema stufenweise verblaßt und damit die Akzeptabilität des Satzes niedriger wird.

- (f) Er bekommt den Verband abgemacht.
- ?Er bekommt das Plakat abgerissen.
- *Er bekommt mein Glück verdankt.

Damit ein bestimmter Effekt zum Subjektreferenten gelangen kann, muß logischerweise eine Handlung bzw. ein Vorgang den Gegenstand affizieren, der für den Subjektreferenten eine gewisse Relevanz hat.